



ビニールタンクから海中に放出されたサンゴの幼生。テトラ環境技術センター提供
—30日、那覇新港沖—

さんご礁回復へ 200万の幼生放流

那覇新港沖 世界で初の試み

座間味村の阿嘉島で採取・育成したサンゴの幼生を那覇新港沖合の海域に放流し、さんご礁を回復させる試みが三十日、行われた。関係者による共同研究は日本では初めてで、世界的にも例がないという。赤土流出や白化現象によってさんご礁の劣化、破壊が進む中、注目されそうだ。

この研究は阿嘉島臨海研究所とテトラ環境技術センター（茨城県）とが共同して、一九九八年ごろから着手してきた。

産卵後、サンゴの受精卵は幼生となり、海域を浮遊しながら、数週間後海底の岩礁や防波堤などのブロックに着底、さんご礁を形成していく。しかし、着底する幼生はごくわずか、そのほとんど

は沖に流失したり、岸に打ち上げられてしまう。そこで共同研究チームは阿嘉島近海で、受精卵を採取し、同島で幼生まで育成。その後那覇新港沖で放流して高密度に着生させる研究を立案した。二十九日に阿嘉島で採取し、運搬に耐えるほどに成長した約二百万の幼生は、三十日午後五時の十個のビニールタンクに海水ごと入れられ、フェリーで那覇港に搬送。その後、那覇新港沖に設置された約六ヶ四方のやぐら内に放流された。やぐらは幼生が流失しないように網の窓を設けたビニールシートで覆われ、海底にはさまざま形状や素材でできたブロックを置き、効果的着底のため比較実験が行われる。